

第二章 夢

これが、若い王の夢でした。

若い王は、ぞっとするような暗い建物の中にいます。

ひどい臭いが漂い、小さな窓には鉄格子があり、日光があまり入りません。

しかし、その弱い光の中で、若い王はたくさんの民衆が働いているのを見ます。

彼らは布を作っています。

彼らはとてもやせ細っています。

彼らは疲れているので、表情は飢え、手は震えています。

青白くて病気の子供たちが、部屋の暗い隅に座っています。

若い王は彼らを見ます。

一人の男が怒りながら若い王に話しかけ、「お前は どうして俺を見ているんだ？ お前は俺のご主人様のスパイなのか？」と尋ねます。

「あなたの主人は誰なのか？」と若い王は尋ねます。

「俺のような男なのだが、俺はみすぼらしい服を着ているし、とても腹が減っている。ご主人様は美しい服を着ていて、とても金持ちなんだ。俺たちは一日中、ご主人様のために働くんだよ。俺たちがワインを作って、ご主人様がそれを飲むんだ。俺たちは土地で働いているけれど、ご主人様は食べ物を食べているんだよ。俺たちはご主人様の奴隷なんだ」

「でも、ここは自由の土地ではないか」と若い王は言います。

「あなたは誰の奴隷でもない」

「戦争中は弱い者が強い者の奴隷だ。平和な時は貧しい者が豊かな者の奴隷なんだよ」

「あなたたちは皆、奴隷なのか？」

「ああ、女たちも子供たちも。年寄りも若者もな」

すると突然、若い王は機械の上に布を見ます。

それは金色です。

若い王は恐ろしくなります。

「あなたたちは、非常に美しい金色の布を作っている。それは何だ？」

「それは、若い王様の戴冠式のローブのためのものだ」と男は返事をします。

若い王はこれを聞くと悲鳴を上げ、目を覚ましました。

しかしその時、若い王は窓辺に黄色い月を見て、すぐにもう一度眠りました。

若い王はまた別の夢を見ました。

これが、若い王の二つ目の夢でした。

若い王は長い船に乗っています。

太陽はとても暑く、百人の奴隷たちが船を漕いで働いています。

船の船長が命令を出しています。

船長はコクタンのように黒く、頭には赤いシルクのターバンをしています。

船長は耳に大きな銀のイヤリングをしています。

奴隷たちが働いている間、誰かが彼らを鞭で打っています。

ようやくその船は小さな入り江に到着し、船長が錨と長い縄ばしごを海の中へほうり投げます。

何人かの男が一番若い奴隷をつかみます。

男たちは重い石を若い奴隷に結び付け、彼を海の中へとほうり投げます。

若い奴隷は水の中へ消えますが、何度も船に戻って来ます。

戻って来るたびに、彼は手に美しい真珠を持っています。

船の船長は真珠を見て、それらを小さな緑色の袋の中に入れます。

若い奴隷は最後に船に戻ります。

彼はとても青白く、疲れています。

若い奴隷は手にとっても美しい真珠を持っています。

真珠は丸く、月のように白いです。

しかし、若い奴隷の耳や鼻は血まみれです。
彼は倒れて死にますが、船の船長は笑います。
船長は若い奴隷の手から真珠を取り、他の奴隷たちは若い奴隷の死体を海の中へほうり投げます。

「この真珠は、若い王様の王笏（おうしゃく）のためのものだ」と船長は言います。
若い王はこれを聞くと悲鳴を上げて目を覚ましましたが、窓辺に星を見て、すぐにもう一度眠りました。

これが、若い王の三つ目で最後の夢でした。

若い王は熱帯林にいます。

そこは、奇妙な果実や美しくて毒のある花であふれています。

草原には蛇が、木にはオウムが、そこら中にサルやクジャクがいました。

若い王は、たくさんの男たちが干上がった川で働いているのを見ます。

彼らは地面を掘り、大きな岩や石を切っています。

死と食欲が暗い洞窟の中にいます。

彼らもまた、男たちを見ています。

死が食欲に「俺にお前の男たちの三分の一をよこせ」と言いますが、食欲は断ります。

「いいえ！ 彼らは私の家来なのよ」と食欲は言います。

死はこれを聞くと、とても怒ります。

死は、その男たちの三分の一を殺すためにマラリアを送ります。

「お前は手に何を持っているのだ？」と死は尋ねます。

「三粒のトウモロコシよ。でもなぜ興味があるの？」と食欲は尋ねます。

「俺の庭に植えるために、一粒のトウモロコシをよこせ」と死は言います。

しかし食欲は「いいえ、それは私のトウモロコシなのよ」と答えて、トウモロコシを自分のポケットに隠します。

これを聞くと死はもう一度とても怒って、熱を呼びます。

熱が火のように赤いローブをまとってやって来て、男たちの三分の一に触れ、彼らを殺します。

「さあ、俺の庭のための一粒のトウモロコシをよこせ」と死が言います。

「いいえ、絶対に嫌よ！」と食欲が答えます。

死は非常に怒って、疫病を呼びます。

疫病は鳥のように飛びながら空から到来し、残りの男たちを殺します。

食欲は悲鳴を上げ、森の中へと走って行きます。

死は自分の赤い馬に乗って、風のように素早く走り去ります。

そしてそれから、竜や恐ろしい怪物が川や谷から出て来ます。

若い王は泣き、「あの男たちは誰だったのだ？ 彼らは何をしていたのだ？」と言います。

「彼らは、王様の王冠のためのルビーを探していたのです」と若い王の後ろで声が答えます。

若い王が振り返ると、白い服を着た男が見えます。

この男は、手に鏡を持っています。

「どの王だ？」と若い王は尋ねます。

「この鏡を覗き込めば、あなたはその王様を見ることでしょう」と白い服の男は答えます。

若い王は鏡の中に自分の顔を見て悲鳴を上げ、目を覚まします。

若い王は、太陽が窓辺で輝いているのを見ます。彼の戴冠式の日です。